

「クリスマス・キャロル問題」とは何か

「エコマネー」その可能性の中心

武 藤 崇

(立命館大学文学部助教授)

ご存じのように、『クリスマス・キャロル』とは19世紀中期のイギリスで、C.ディケンズによって書かれた寓話である。主人公は、スクルージというケチで気難しい老人である。そのスクルージが、クリスマスの前夜、3人の幽霊に導かれて自分の過去・現在・未来を見せられ、最終的に慈悲心を取り戻し、改心するというストーリーとなっている。その寓話が書かれたイギリスは、産業革命によって経済発展を遂げたものの、その一方で貧富の差が拡大し、さらには従来のコミュニティが崩壊、その結果、病人、老人、孤児、障害者といった社会的弱者が路頭に迷い、「救貧院」という施設に収容・隔離され始めた時代であった。

本稿では、1)『クリスマス・キャロル』という寓話を象徴として、現代の心理・行動的問題を顕在化させ、2)その問題に対する「エコマネー」による寄与の可能性を検討することを主たる目的としたい。

「クリスマス・キャロル問題」とは何か

本稿において「クリスマス・キャロル問題」とは、「貨幣や貨幣経済を汚いもの」として忌避し、その対局に『愛』『慈悲心』を価値あるものとして設定する話題構造。あるいは、その構造によって引き起こされる、具体的事例に対する解釈の矮小化・歪曲化」と定義する。この問題構造は現在、バブル景気崩壊後の長引く不況や理解困難な凶悪犯罪などを背景に、より強固なものとなっていると言っても過言ではないだろう。しかし、このような問題構造こそが、現状の問題をより深化・悪化させ、新たな問題を生じさせる可能性も考えられる。このような問題指

摘は、心理学的立場としては全く正反対であると一般的には考えられている、「精神分析学」と「行動分析学」の双方からなされている。以下に、双方の指摘を紹介することにしたい。

精神分析家で「心理経済学」の提唱者である妙木（2000）は、この「クリスマス・キャロル問題」を既に指摘してきた。彼の指摘によれば、スクルージ老人の問題は、「社会的ひきこもり、家族や他の人間との関係を険悪にしてしまうような人間関係（Pp. 133）」にあり、「『もの』としての貨幣へのこだわりが一種のフェティシズムになっていて、ペーパーマネーや投資のための前提である『信用』が失われて神経症症状を呈しているほどに閉塞し、人間関係を計算できない（同上）」ことにあるとしている。さらに、貨幣経済における貨幣の運用という視点からも、彼は貯蓄のみで投資・投機しておらず「交換の原理」に見合っていないため、消費や社会に不満があるとし、「だから、彼をして『お金に汚い』ことを愛の欠如の例のように取り上げるのは間違いです。同じことは、社会経済状況についても然り。当時の社会経済状況で問題であったのは、イギリスの社会システム、所得移転ができないようなシステムの形骸化にあって、人々に慈善や愛の心が無いことが問題ではない（Pp. 134）」と指摘している。逆に、妙木（1999）は「お金の原理」と「愛の原理」が対立するような構図を棄却し、^{ききやく}「心を一つの経済活動とみなすと、今まで『愛』で語られてきた家族のあり方の多くが、実は非常に経済現象に近い形で動いていたことが発見できる（Pp. 42）」とさえ主張している。

一方、行動分析家で「行動福祉学」の提唱者である望月（1999）も、貨幣導入によるコミュニケーションの活性化を指向している。そこで取り上げられているコミュニケーションとは、「自己決定」と一般的に言われているものである。彼によれば、サービス提供場面における自己決定の多くは、「常に『聞く耳を』持って接する」といった「思いやり」や「権利『意識』」の問題に還元され、現実的には「聞くだけに」終わりがちであることを指摘している。また、サービス提供者と被提供者との間にあるパターンリズムという潜在的な「権力関係」もフェアなコミュニケーションを阻害する要因と考えられている。そのような状況を変更していくのに必要なものは「『フェアな交換』という意味での自己決定を、周囲がその実現について客観的に監視でき、その拡大や縮小を評価できる設定（Pp. 52）」であ

るとしている（もちろん、フェアな交換を監視・評価できるということは、その設定にはフェアな交換を可能にする交換手続きやシステムが組み込まれている）。さらに、そのような設定は「公正交換指標（fair exchange marker）」と呼ばれ、「貨幣」を使用した購買場面がその典型例とされている。この公正交換指標はその他に、福祉施設などで実施される「要望を訴える集会」が例として挙げられている。しかし、「貨幣」は、「要望を訴える集会」と比較すると、現在の社会システム（法律や商業道德など）として公正性が監視・保障されているため、「新たな物理的設定が少なくすむ」「使用範囲が広い」といった点から考えて、汎用性が高いものであると考えられている（望月, 2002）。

「エコマネー」その可能性の中心

今回の中山氏の講演（中山, 2002）において、上述の問題に関係する「エコマネー」の機能的な特徴は、1）人と人とのコミュニケーションの形成を目的としている、2）「互酬」を基礎とした対内通貨であるため債権債務が生じない、3）通貨の偏在・貯蓄を許さない、といった点を挙げることができよう。『クリスマス・キャロル』の主人公であるスクルージ老人は、貨幣に対するフェティシズムのために対人関係に問題を抱えていた。もし、「エコマネー」システムの導入と使用がなされていたとしたら、上述の「エコマネー」の特徴から類推から考えれば、スクルージ老人にそのようなフェティシズムも対人関係の問題も生じていなかったであろう。もちろん、「貨幣・貨幣経済」に対して「愛・慈悲心」がことさらに強調される必要性もなくなるはずである。

また、妙木（1999）において主張されていた「家族のあり方の多くが、実は非常に経済現象に近い形で動いている」という仮説は、実際に「エコマネー」導入によって（逸話的ではあるものの）支持されている（岡田, 2002）。さらに、望月（1999）の「公正交換指標」の例である「貨幣」を使用した購買場面では、社会的な立場の弱い者は絶えず消費者（consumer）の位置に留まり、役割の交換をも含んだ交換者（exchanger）とはなりうるかについては未分離のままである。つまり、「公正交換指標」という呼称と具体的事例との間に機能的な乖離があることは否め

ない。しかし、「エコマネー」の事例には「何もできないと見なされがち、思いがち」な老人たちが「交換関係」に開かれていく状況が多く紹介されている。このような事例の方が、望月の提唱する「公正交換指標」の例としてより矛盾がないと考えられる。

以上のように、「クリスマス・キャロル問題」に対する「エコマネー」の寄与は、その機能的な特徴もさることながら、実際に検証可能であるという点からも、期待できるものと考えられる。

『鏡の国の』クリスマス・キャロル問題 「エコマネー」言説への危惧

最後に「エコマネー」に関する僅かな危惧について触れ、本稿の結びとしたい。その危惧は「エコマネー」システムの手続きではなく、その言説に関係している。問題の言説とは、今回の講演にもあったように、エコマネーを「お金では表せない助け合い、善意を評価して交換するための手段としての新しい通貨である」というものである。つまり、この言説の内容は「思いやり」「エコマネー」「交換」という順序を説明している。

この言説は、「クリスマス・キャロル問題」に絡め取られている多くの人々に対する「言語的戦略」であるならば何ら問題はない。この言説に誘導され、その結果「エコマネー」を使用するようになれば、「クリスマス・キャロル問題」はその実行のうちに解消されていくと考えられるからである。しかし、そうではなく、字義通りの意味で使用されているとしたら、この言説は、新たな次元の「クリスマス・キャロル問題」に絡め取られていることになる。ここで焦点となるのは、「貨幣」ではなく「言語」である。言語に関するフェティシズムの問題である（丸山, 1984）。「貨幣」と「言語」との関係は、言わば「鏡像（パラレルで同構造を持つが同一ではない）」関係のようなものであることから、再度、寓話を援用させていただくとすれば『鏡の国の』クリスマス・キャロル問題」と言えるかもしれない。このような新たな次元の問題を慎重に扱わざるを得ない場合に、どのような対処が考えられるだろうか。それは、従来の「貨幣」に対して「エコマネー」という新通貨システムというオルタナティブ（代替案）を用意・使用したように、

従来の「心身二元論」的言語システムに対して「新たな」言語システムを用意・使用していくことなのではなかろうか (Skinner, 1974)。

文 献

丸山圭三郎 (1984) 文化のフェティシズム。勁草書房。

望月 昭 (1999) 「自己決定」を保障し監視するシステム。月刊実践障害児教育, 309, 50-53.

望月 昭 (2002) 私信 (8月12日)。

中山 昌也 (2002) 21世紀のコミュニティを創生するエコマネー 学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ2 立命館大学人間科学研究所, 1-21.

妙木 浩之 (1999) 心理経済学のすすめ。新書館。

妙木 浩之 (2000) こころと経済。産業図書。

岡田真美子 (2002) 事例報告「キャンパス発ITエコマネー」。第11回エコマネー・トーク (1st, March)。

Skinner, B. F. (1974) About behaviorism. New York : Knopf.